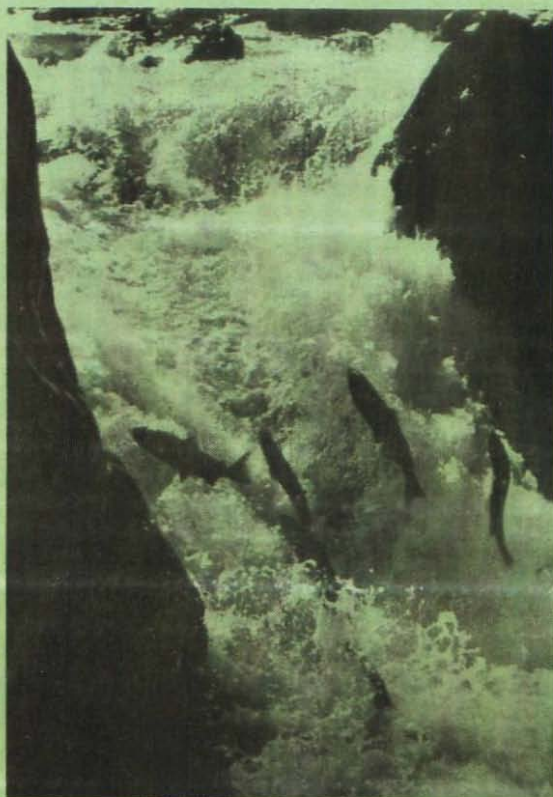


釧路水試だより



急流をのぼるサケ

23

巻 頭 言

- 北米の旅を終えて(一)
- ソ連極東漁業見聞記
- ソ連邦の漁業基地ナホトカ市を訪ねて

昭和46年1月

北海道立釧路水産試験場

巻頭言

場長 福原 暁

明るく希望に輝く新春を迎え、皆様心からお慶びを申し上げます。

今年は、第三期北海道総合開発計画実施の意義ある初年度に当り、吾々はこれを肝に銘じて北海道の輝やかしい将来に向い最大の努力を傾注しなければなりません。

さて、道東水産業の過ぎ去った一年を振り返ってみると、近年にその例がない程波瀾に満ちていたとも言えます。

即ち、年初の暴風による大時化と、大流水群の来襲による漁船、漁具及び海浜施設や、コンブに対する大災害。また、スケ子に対する添加物の規制、スルメイカの凶漁等はその最たるもので、正しく道東水産業を震がしたものでした。道東の新春は、例年春告魚によって幕明けしますが、昨年は近年にない不漁に終っており、今年も各種の調査結果から余り期待がもてそうになく、遺憾に思っております。

次に北緯四八度以南のサケ・マス漁ですが、カラフトマスの不漁年にもかかわらず、プリストル系ベニザケの好漁に支えられ、冴えない市況をよくカバーし、まずまずの漁に終ったことはご同慶に耐えませんが、延縄漁業の極端な不漁は業界のため誠に遺憾なことだと考えております。

今年は幸いカラフトマスの豊漁年に該当し、かつプリストル系ベニザケの豊度も比較的高いとみられますので、以南サケ・マス漁業はソ連の厳しい再規制のない限り順当に推移するものと考えております。しかし、明年はカラフトマスの不漁年となり、かつプリストル系ベニザケの豊度も低下しますので、その

対策を今から真剣に考えておかなければなりません。

道東の夏と、秋漁の横網格は何と言ってもサバと、サンマ・スルメイカです。サバは道東沖で二万余トンも獲られ、その中約一九万トン余りが釧路に水揚げされましたが、この数量は記録的と言ってもよいでしょう。しかし、前年同様二年魚玉体に一年魚混りと言う魚体組成は将来の資源に一株の不安を与えるもので、産卵親魚を確保するため或る程度の小型魚の漁獲規制等は、重要かつ緊急な課題の一つと言えます。

サンマは全国で八万数千トンの水揚げし、特に魚価高に支えられ、これに従事した漁船は前年に比べて明るい表情でした。しかし、日本近海のサンマ資源は今後短期間に往年のように回復するとは考えられないので、その管理には充分注意する必要があると考えます。即ち、資源の減少からその漁期は短縮し、漁場は一般に北偏すると考えられますので、ソ連のサンマ漁業等も勘案し、解禁日を早める必要があります。また、操業期間の短縮によるその後の兼業を真剣に考慮することが肝要で、現状ではスルメイカとの兼ね合いが適切だと考えます。また、漁業労働者を確保することが至難な状態ですので、省力化のための漁具漁法試験等は緊急要事です。

次にスルメイカですが、昨年は全国的に近年にないような不漁に見舞われ、異状なまでの魚価高もこれをカバー出来ず生産者は窮乏しましたが、特に根室地方における産地加工業界の受けた打撃は、誠に甚大であったと言わなければなりません。近年、本道で主群をなしている太平洋系冬生れ群の漁獲が特に不振

であつたのは、海況要因もさることながら来遊資源量の稀薄がその主原因と考へられます。一方、スルメイカ漁業における漁海況の予報はその根拠が誠に薄弱なので、今後産卵場調査や、北上期の調査を充実し、その予報精度を向上するように努めなければならぬと痛感しております。

道東の沿岸漁業として重要なものにケガニと、シヤマモがありますが、ケガニは昨年の不漁をよそに水試の予報通り好漁に推移しております。この漁業は、二年前から資源維持のため漁獲量容量方式を採用しておりますが、その効果が徐々に現れて来つつある証査だと思えます。今後は他の漁業（底曳刺網等）とも協同で、ケガニ資源の保存に努力する必要があると思えます。

シヤマモについては、大きな不漁に見舞われ、一面最高一二、〇〇〇円台にまでその魚価は暴騰しましたが、結果的には水揚げ金額においても大きく後退しました。昨年のシヤマモの不漁は産地の日高・十勝・釧路管内全般に亘っており、今後の資源対策を充分検討する必要があると思えます。

釧路市は、昨年第二位の八戸市を大きく凌駕し、漁獲量五八万トン台の新記録で引き続き全国第一位となったことは、誠に慶賀に耐えないところで、このように道東地域は、現在吾が国における重要な動物蛋白食糧の供給地帯なので、道東のこの地域使命が、今後とも達成出来るよう、當場としては最大の努力を傾注する所存です。

昨年の秋、私は北米太平洋岸の水産事業を視察する機会を得ましたが、米國カナダでは非常に水産資源の維持培養に力を注いでおり、試験機関の研究結果にもとずいて行政がこれ等の施策を強力に推進し、業界もこれに積極的協力しております。特に、サケ・マス・オヒョウについてはそれが徹底しており、例えばサケ・マスについては、資源を維持するために必要な産卵親魚数を確保することを優先した上で漁獲量を決めております。そのため、毎年主要河川毎にサケ・マスの来遊予想量、産卵逃避魚の目標量及び漁獲可能量を定め、逃避目標量の確保状況をみつけ、週間操業時間を定めてこれを現地を発表し、漁業者に周知徹底させるという方法を厳しくしております。米國では、その効果が著しく上っており、近年サケ・マスの漁獲量は一五万トン前後で安定しております。

吾が国におきましても、資源の維持培養を計る施策が近年とみに増加しつつありますが、米・加等に比べればまだまだ格段の相違があるようです。資源が

あつて初めて漁業と、加工及び関連産業が成立つので、今一度日本近海の重要資源について再検討し、それ等の資源を維持して、恒久的に漁業を行するための施策を考え、これを着実に実行することが、吾が国漁業の将来にとって、最も大切なことだと痛感しております。

ところで、昨年末に来場したソ連漁業調査団の一行は、北洋におけるサケ・マス・カニ以外の重要資源についてもその漁獲量を個別割当方式にすべきだと言ひ意味のことを強調しておりますので、特にスケトウダラ等についてはその資源調査を強化して、これに、対処出来る資料の蓄積が必要だと思えます。

最近、釧路地方では別途前川や、新釧路川が工場排水によって汚染されており、サケ・マスや、シヤマモの接岸、そ上に影響を与えていることはたしかだと思ひます。特に新釧路川はこれ等貴重な魚類資源のたね川ですから、これ以上汚さないように関係者は注意しなければなりません。大企業の会社は公害に対する設備投資が出来るからまだしもですが、中・小企業の例えば水産加工場等では、この施設が直接生産に結びつかないので、その実施に極めて困難性を伴っております。それですら、宮城県で成果を上げている地方公共団体の公害融資に対する利子補給の制度等を参考にすることも実施を可能にする一方法だと思ひます。

吾々は、河川や、沿海を何時までも清浄にし、道東地方に魚貝藻類を増々繁殖させて、豊富な海の幸を国民へ恒久的に供給出来るよう最大の努力を傾注しなければなりません。

なお、旧ろう当場所属調査試験船北辰丸が不測の火災事故により多大な損害を蒙り、各位にご迷惑をお懸し、かつ特段のご配慮を賜りましたことについて衷心よりお詫びと、感謝を申し上げる次第です。

終りに臨み、新年における皆様のご健康と、ご発展を心からお祈りして新春のご挨拶といたします。

北米の旅を終えて(一)

場長 福原 眺

広大な、北海道の移り行く山野の情景を車窓から眺めていると、遙か雲の彼方にアラスカの雄大な自然と、カナダの自然と人工に研ぎ澄まされた美を見事に調和した素晴らしい風景がはつきりと脳裏に展開し、私は再びその中に誘い込まれる想いがするのである。

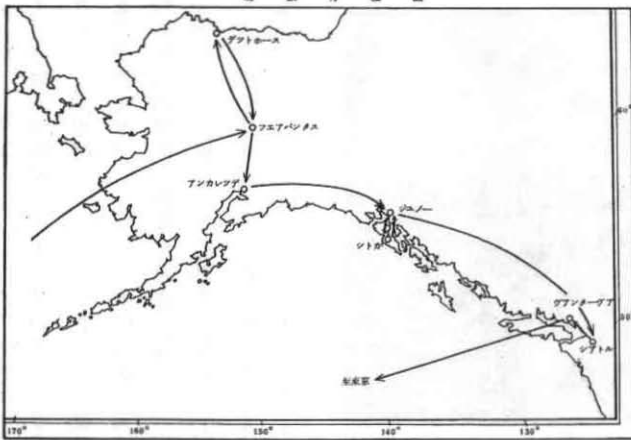
これから筆のおもむくままに、北米の視察旅行で見聞した事柄、特にその水産事情について紹介してみたいと思う。

釧路から東京へ

殊の他暑さの敵しかった釧路の夏もどうやら終り、一雨毎に湿原を通る風が涼しさを増している九月三日は釧路空港を後に、北海道アラスカ経済視察団の一行に加わって、一路アラスカ、ワシントン州、及びカナダの視察調査に旅立ったのである。

かえりみると、六月半ば道からこの壮途を内示されたが、その主要な目的は、昨年アラスカ州立銀行総裁の北海道公式訪問に対する返礼と、アラスカにおける産業、経済特に水産、林産、及び石油資源に関する開発利用の

ための視察調査であった。このため、アラスカのアンカレッジ・フェアバンクス、極北のノーススロップ・ジュノー、シトカの各地



視察行程図

を約一週間に亘って公式訪問するのである。その後、私は約十日間でアラスカのジュノー、ワシントン州のシアトル、カナダのパンクーバーにおいて水産の行政と、研究機関、及び水産会社を単訪訪問し、北米太平洋岸の水産事情を専門的な立場で視察調査をし、これをつぶさに道へ報告することが義務づけられていた。

幸い、出発まで、二カ月程度の余裕期間があったので、訪問国の水産資料を極力収集し勉強すると共に、英会話の学習を~~も~~したものである。想えば、前者については非常に効果的であったが、後者については遺憾乍ら期間があまりにも短かかったため心もとなく、冷汗をおぼえたこともあったようである。

それはさておき、釧路空港は今にも秋雨の訪れを待つような空模様であった。しかし、飛行機が帯広に着陸する頃には晴天となり、辛先きのよいスタートと思えた。

その日、道庁で関係者と視察調査についての最終的打合せを行なったことは言をまたない。

翌朝、札幌の空はあくまでも青く、巻積雲の繊細な白さが鮮やかにそれとコントラストをなしていた。千歳空港までの沿道は、まだ緑が鮮やかに風になびいて、静かに秋を待つ

ているようにも想えた。バスの窓から千歳空港が間近に見える頃、九月の空は変り易く密雲が俄かに垂れこめて、時雨が素早く沿道を通って行った。

千歳一一時四〇分発東京行き五〇六便は一五分程遅れて飛び立った。スチュワードスのアナウンスが終る頃、機は密雲を眼下にコバルト色が何処までも続く空の中にあつた。正午過ぎ、機は羽田空港に着陸したが、東京はまだ焼け付くような日射しであつた。

東京からアラスカへ

九月六日の十四時二十分、炎暑にうだるような東京を後に、吾々視察団の一行はバンアメリカン航空八〇〇便の人となり、キーンと言う音を耳に刻んで急上昇した。高度九〇〇〇米の上空はコバルト色に晴れ、眼下に密雲が千変万化していた。機は大きく右に旋回、方位を北東にとり、太平洋をその直下に宇宙突き進んでいる。一七時頃、時差の関係で太陽も西に傾き、雲海の彼方が薄七色に輝いて機は急ピッチで夜のとばりへ突入して行った。静まり返っていた機内が、急に賑やかになつた。夕食である。スチュワードスが軽快に食事を運んで行く。清潔なプラスチック製のお盆の上には若鶏の揚げもの・ハム・サラダ

バター付きパン・チーズ・ケーキ等が吾々の食欲をそそり、フォークとナイフが活発に動いて行く。バンアメリカン航空のスチュワードスはお世辞にもサービスが良いとは言えないが、食事時のコーヒーとティー（紅茶）を反復サービスしていた。機内は夜の更けるのも知らぬ気に、談笑に過ぎて行く。午前二時半過ぎ、機は静かに高度を下げ始めた。闇の中に吸いこまれ、落ちて行くような感じがし、耳が急に痛んで来た……



ユーコン河支流

気圧のためである。

すると、突然前方の下に水晶のかけらを無数に散りばめた様な状景が展開した。フェアバンクスである。吾々の眼下に今、フェアバンクスが静かに眠りに入っている。ジェットの号音でそれをさませせてはならない。さながら、放射状に散りばめられたような無数の水晶片の輝きが次々に大きくなり、ゆっくりとそれが変化して行く。機は大きく旋回し、着陸体制に入った。

滑走路に巨大な車輪の触れるショックを五体感じた時、安心感でやっばりほっとしたものである。羽田を飛び立って約六時間半、吾々はその第一の目的地アラスカ・フェアバンクスの人となつたのである。飛行機のタラップを降りる皮膚に摂氏七度の空気が冷たかつた。

空港にはフェアバンクス市や、商工会議所の幹部が多数出迎えていた。時計は午前三時少し前を指しており、直ちに特別仕立てのバスで一路宿舎のトラベラーズホテルに向う。四時ベットに入るや羽田以来の疲れが一時に出て忽ち夢の世界に入った。

カーテンの透間からもある日射しで、目を覚ましたのは午前九時頃であつた。フェアバンクスの朝は良く晴れて空気が

実にすがすがしい。気温は摂氏一〇度内外であらうか肌寒く、北海道の一〇月末の様相を呈していた。

ホテルの食堂で軽い朝食をとる。何処を見ても白人と、英語が吾々をすっぽりと包んでいる。吾々は今、アメリカ最北アラスカ州のほぼ中央部にいたのである。この朝、私はそれをしみじみと感じたものである。

アラスカの歴史

ここでアラスカとフェアバンクスについていささか述べなければならぬ。

ご承知のように、アラスカには多彩な歴史が内蔵されている。一七四一年、かの有名なデンマーク人ベリングによって探検の歴史は始まったが、ロシア帝政の命によるこの探検は残念ながら日の目を見なかったのである。しかし、一七七八年、有名な英国人キャプテン・クックが探検に乗り出し、アラスカの海岸線を世界地図上に書きしるすのに大きな貢献をしたのである。

一方、ロシアは一八五三―一八五六年のクリミア戦争に敗北し、経済的な貧困から一八六七年に一エーカー当り二セント足らずの七二〇万ドルでアラスカ全土を米國に売却したのである。今考えると夢のような話でもある。



アラスカ大学

る。

アラスカはその面積五八万六四〇〇平方マイルもあって、日本の約四・二倍、北海道の約二〇倍に相当し、そこには膨大な水産・林産・鉱物資源が埋蔵されている。

アラスカが米國領になって間もなくの一八九六年には、ユーコン地域、続く一八九九年にはノーム、また一九〇三年にはフェアバンクスで金鉱が発見され、世界的なゴールドラッシュを生んだものである。私は、フェア

バンクス郊外に今でも保存されている、くち果てた当時の金鉱開拓者の小屋を見て、名優チャプリンの演じたゴールドラッシュの映画をなつかしく想起したものである。

第二次世界大戦の後、アラスカは戦略上の防衛基地としてその開発に拍車がかげられ、道路の新設整備、港湾設備の整備、飛行場の新設等が活発で、建設産業を中心として関連産業が発展し、人口増加とマーケットの拡大が行なわれている。

アラスカの産業は今まで水産業・林業・鉱業の順であったが、現在は石油業がだい頭し残念ながら水産業はその首位の座を奪われようとしている。

アラスカ第二の都会フェアバンクス

フェアバンクスは人口約四万六〇〇〇人の小都市で、前述したようにアラスカ内陸に位置し、アラスカ第二の都市でもあり、かつてはゴールドラッシュの中心地として栄え現在は極北ノーススロープの石油開発の重要拠点として、また銅・石炭・亜鉛等採鉱業の重要な基地になっている。

この町には、アラスカ開発のため、一九一四年創立された有名なアラスカ大学があって、フロンティア精神に燃えた学究が二四ヶ国か

らも集まり、フェアバンクス郊外の高台にそびえている校舎の百花爛漫する校庭で、それ等の国々の国旗が清らかな大気になびいていた。

アラスカ大学二年生のボブ君が、アルバイトで運転ガイドするスカイカラーのスマートな特別バスに乗り、郊外を視察したが、その広大な山野は紅葉に色付き、その中をユーコンの支流が大蛇のようにうねりながら滔々と流れ、さながら北海道の根釧原野に似たものを感じとった。しかし、その規模においては北海道の比ではない。

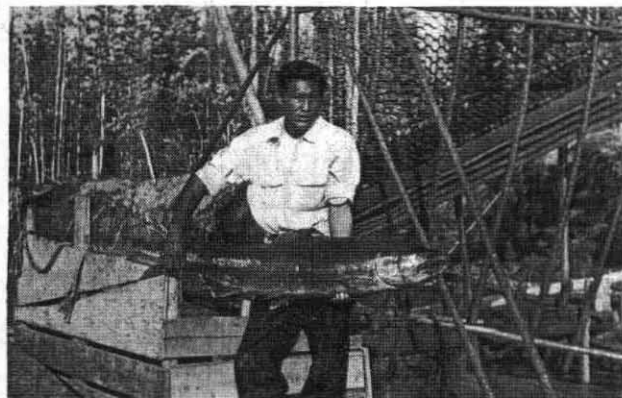
アラスカには幾百と言う河川・湖沼がありそれが自然のままに保たれて、莫大なサケ・マス資源が維持されている。現にフェアバンクス郊外のユーコン支流にも無数のサケ・マスがそ上し、その上流でたゆみなく種族維持がなされている。

バスはアラスカ大学の広大な実験牧場を走ったが、そこではジャコウ牛が飼育されていた。この牛の毛は良質な毛織物になるところから、極北地方で絶滅しつつあったのを繁殖させるため、飼育実験をしているとのことであつた。

沿道には洋松や、白樺の林が何処までも続いているが、それ等のどれもが細く、誠に貧弱

な林相を呈していた。これはアラスカ内陸部で共通に言えることで雨量が極めて少ないことが原因しているとのことである。

その日の夕方、ホテルの大ホールでフェアバンクス商工会議所会頭主催のレセプションが盛大に開催された。たまたま、州政府労働担当のM氏と、日本実業家のN氏と知り合い、色々アラスカ事情について懇談をした。午後七時頃、フェアバンクス商工会議所



アラスカの巨大なベニザケ

会頭からユーモアな挨拶の後、那須団長へアラスカ名物の金の置物のプレゼントがあり、また、団長から北海道名産アイヌのユーカラ織りを会頭にプレゼントし、約二時間のパーティーは実に愉快に、そして有意義に幕を閉じたのである。

N氏は是非自宅へ案内すると言うので断り切れずその好意を受け、他の団員二・三名と共に同氏のデラックスな車に乗る。

N氏はフェアバンクスに広大な土地を買いかたわらレストランの経営や、筋子の製造加工業を行なっているのである。途中、山と積まれたスタック置き場を自動車の窓から眺めながら、彼の事務所に行く。二階は事務所と居住区になっており、その下は倉庫と加工場で、五人の日本人が筋子とイクラの製造に励んでいた。主任は東北籍で私に色々説明してくれた。青森県の人である。

二階でビルをご馳走になりながら色々懇談した。彼はレストランを経営する関係上サケをその材料にしばしばする。そこで、その卵はどうするのかとサケの供給者に聞いたところ、全部捨てているとのこと。そこで、これに着目し二週間前から筋子製造に着手したばかりだと言っていた。原料は飛行機で、

主としてフェアバンクス以北の内陸河川から集めて来るのである。事務所の傍をユーコンの支流が滔々と流れていた。

アラスカは労働者の天国

アラスカは労働者の天国で、非常な高給である。いわば彼等はアラスカ産業の稀少価値なのである。労働組合が非常に強く、他国の労働者を全くシャットアウトしている。それだから日本では筋子製造の人達を技術顧問と言う名目でアラスカへ送り込んでいる。連邦政府の法律で、外国労働者の入国は禁止されているのである。

しかし、資金をもってアラスカで事業をすることに對しては非常にこれを歓迎している。事業をするようになればアラスカ州政府はこれを保護してくれると言う。くだんのN氏は相当な資金を持ってアラスカに乗り込み、全て玩地の白人を使い、多少高くても現地のフェアバンクスから物資を購入している。(シャトルから直接購入すれば安価である)。それだから労働組合と、フェアバンクスの人々から非常に歓迎されているとのことであった。

N氏のこと

ここで、一寸N氏の横顔に触れて見ることにする。

彼は現在三八才、横浜に会社の事務所を持つている。一才で終戦を迎え、その後靴みがき・港荷役・米軍の仕事等々をして、非常な辛酸をなめたと言う。その当時の車の友人は現在佐官級になっており、米上院議員にも知り合いがいるとのこと、米国商務省の世話で現在の事業をしている由。つい最近、軍の大型ヘリコプター三〇機のスクラップを落札し、フェアバンクスの人達を驚かしたと言っていた。

N氏は身長五尺少々の小男だが、その度胸と雄辯、才覚は見上げたものである。引込

ソ連極東漁業見聞記

漁業資源部 中山 信之

昭和四五年、第十二回ソ連極東漁業視察

団(日ソ漁業条約にもとづく学識経験者の交換)の一員として参加し、一行五名は、八月

二〇日より十月二日までの四四日間、わたって西カムチャッカおよびサハリンの漁業事情を見聞する機会を得たのでその様子をご紹介します。

み思案は駄目だと言う。何んでも積極的に仕事をすることが自分のモットーだとも言う。更に、日本人の勤勉と、約束履行の気持ち、義理人情があれば必ずアラスカ、いな世界で成功出来るかと結んでいた。そして、日本人は狭い国土にひしめきあわないうで、もっと世界に勇飛しなければならぬと付け加わっていた。スコッチを傾けるその五体から、事業に對する情熱が沸々と迸るものを感じ取り、大いに共感したものである。

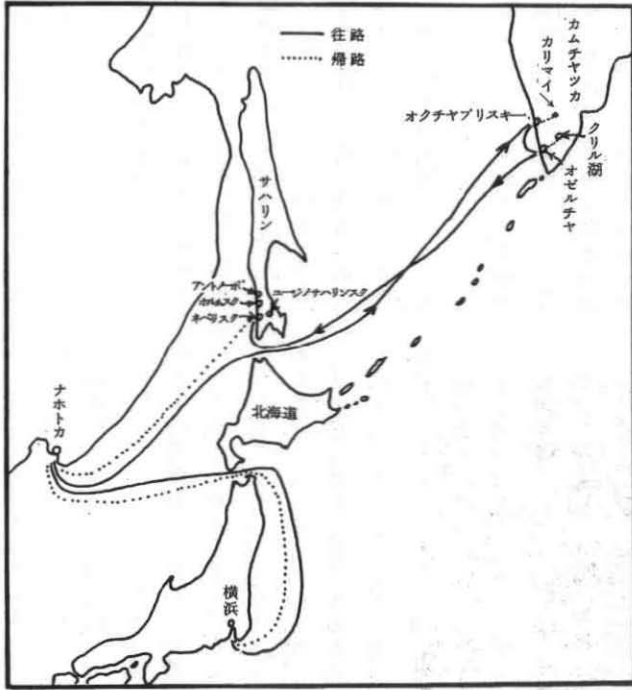
外へ出ると、アラスカの空に星がきらめき冷気がすっぽり体を包んで、フェアバンクスの夜は更けていた。

西カムチャツカの漁業

極東地方のサク・マスの主要な再生産の場所であるこの地方では、サク・マス資源の減少が常に強調されていた。ソ連側の説明によると

カムチャツカ全体で十八カ所あった漁業コンビナート（以下コンビナートと呼ぶ）が昨年までに六カ所（すべて西カム）が閉鎖され、現在では西カムチャツカ五カ所、東カムチャツカ七カ所あるのみで、閉鎖されたコンビナートはさげすみの来遊、そ上がほとんどないためである。しかし視察したオクチャブリスキー、オゼルナヤのコンビナートの事業推進

状況を見聞したところでは、サケ・マス以外のスケトウダラ・カレイ・コマイ・マダラ・カチカなど近海においてトロール船（三九トンと四〇〇トン）によって漁獲されるものが、計画の主要部分を占めており、今までのサケマス中心よりそれ以外の魚種に重点を考えて行く方向が打ち出されて、生産向上の大きな柱となると思われる。このように漁船漁業



西カムチャツカ・サハリン視察経路

が発展していくとなれば、それに伴う漁港施設が問題となり、現在西カムチャツカで私達が視察したオクチャブリスキー、オゼルナヤに河および河口を利用した漁港の施設があることから、おそらくサケ・マスを含めてコンビナート経営の合理的な整理統合も充分考えられるところである。漁船漁業による生産計画の主体への移行は数年前よりうかがわれ、コンビナート直営であったサケマスは、漁業コルホーズ（以下コルホーズと呼ぶ）のみ建網、刺網によっておこなわれている。このことはサケ・マスの魚価が高く経営上に非常にプラスになることがいわれていた。コルホーズもコンビナート同様、生産計画についてはサケ・マス以外の魚種も対象としている。したがってコンビナート、コルホーズは、トロール船を有している。コンビナートは小型トロール船（三九トン型）が多く、コルホーズの所属船と直管船による漁獲物の処理加工が業務の主体となっている。オクチャブリスキー、オゼルナヤ両コンビナートおよびコルホーズには、*МЭЛ*型（三九トン）が三十四隻、*ЭЛ*型（二〇〇トン）一隻、*ЭЛТ*型（三〇〇）と四〇〇トン）が四隻ある。漁獲の対象魚種はスケトウダラが一番多く、次いでカレイ・コマイマダラ・カチカなどである。スケトウダラは

二・三月と六月頃までで、その他はほぼ四月と十一月の間である。魚種別の利用についてみると、スケトウダラはフライ、ミール、魚油など、カレイはトマトソース漬けの缶詰にマダラは肝臓摘出後、冷凍する。肝臓は肝油の原料となるが一部は、水煮缶詰にされ食料に供される。柔らかく油があり、口に入れると、とろけるようで非常においしい。

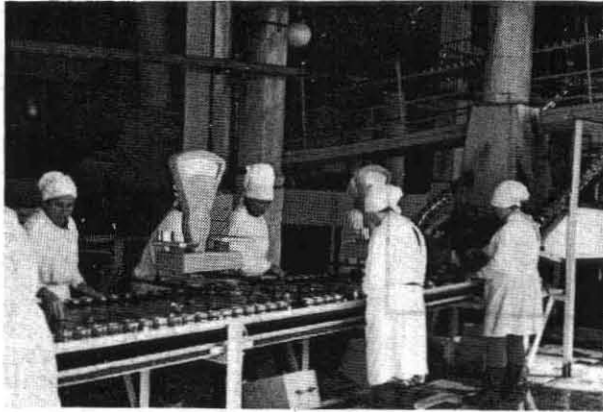
その他シシャモが五月七月、建網で混獲され冷凍して一部は輸出している。

また、スケトウダラの卵を缶詰にして、輸出しており、その送り先は日本であろうと話していた。スケトウダラの利用は、原料に対し八〜十二％程度あり、卵一キロ当り施塩量は十六％であると説明していた。

サケ・マスについては、魚の完全利用（コンビナート内でボスターが多くみられた）という点で、量的にも少ないことがまたひとつの原因であろうが、チビット缶詰は、勿論頭やヒレについた肉、その他雑肉を入れ、ウーハーという日本の三平汁のような水煮缶詰が製造され、缶詰一色である。サケ・マスが好漁の時代には、ボーチカ漬けも相当大量に製造されたであろうが、現在では、ほとんどない。オシヨロコマは多いが、ほとんど、カレイ同様、トマトソース漬けの缶詰となって

需要に追われている。ベニザケの水煮缶詰は需要に応じられている。価格は日本円にして二〇〇円より二八〇円位である（サケ・マス水煮缶詰）。

以上が西カムチャッカの様子ですが、サケマス漁業の衰退にかわって、漁船漁業による生産活動が發展しています。しかし、基幹漁業であった、サケ・マス漁業が、近い将来、資源の回復を見て復活することを大きく望んでいます。特にオゼルナヤのコンビナートでは



カレイの罐詰作業
(オゼルナヤ漁業コンビナート)

ベニザケに対する執着は、将来の構想からも相当根強いものが感じられました。

私達が滞在した時は、九月上旬で西カムチャッカの山々の景色、気候などは、北海道、特に道東地方と非常によく似ており、荒涼たる原野が広がって空気が澄み渡り、酪農などが適しているようにも思えました。私達に対する歓迎振りも、すつかり板についており、まるで旧知にあつた様な気がして、トンチのきいた会話と手振り足まねと筆記で、なんとか話が通じ、飲んで歌つて、あげくの果ダンスに興じ、旅行に楽しい思い出になつたものです。こうして、九月十一日、オゼルナヤよりアカデミックベル号に乗船、サハリンのネベリスクに向けて出発しました。

サハリンの漁業事情

九月十五日、ネベリスクに上陸後、九月二十四日までホルムスク、ユーシノサハリンスクの水産関係、アントノーボ（楽麿）の研究所を視察した。

サハリンにおいても西カムチャッカ同様、サケ・マス資源の減少が強調されたが、人工ふ化を、おこなっているシロザケは横這い状態である。

サハリンの漁業の發展振りは目ざましいも

のがあり我々に説明する時にもその意気込みが感じられ、ソ連の漁業に対する力の入れようが、うかがわれる。極東の漁業の一翼を背負っているサハリン漁業局長のルイトフ氏の説明からも、その目ざましい発展振りを知ることが出来た。

すなわち、最近二十年間のサハリン・千島方面の漁業の発展のテンポが非常に早く、漁法の機械化が大きく躍進し成果を上げている。十五年前頃までは、小型漁船、建網漁業が中心であったが現在では、大型加工母船及び大型漁船の編成で、遠洋海域まで行動範囲が拡がり、隻数も多い。

ソ連における蛋白資源は不足しており、漁業基地の港湾整備、漁場の開発が急がれている。漁場開発にはオーストラリアのマグロ、日本近海のサバ・スルメイカなどがあるが、当面、サバ漁場の開発に重点が、おかれている。特に極東海域のニシンの漁獲不振が、相当影響しているようである。その他、千島サハリン、日本近海及び北太平洋海域での資源量では、充分とはいえないので、インド洋北部、ワシントン州・オレゴン州の海域の開発を考えている。

漁獲物の八十五％は母船上において加工されていることより、大型の新型母船の建造及

び、それに乗組む船員を養成しなければならぬ。母船は二万トン級の電気自動化されたもので、普通船員ではためなので、特別に、上級幹部はネベリスクで、下級幹部はコルサコフ（大泊）において養成している。また、漁船の乗組員に対する厚生関係の施設の充実を力を入れ、特に船員の専用病院の完備、保養所の建設が進められている。現在サハリンでは、トンナイ湖畔に新しい保養所が建設中である。サハリン漁業局は、過去政府よりの



ボルジョイ河における曳網

援助金を必要としていたが、現在では独立採算が出来るまでに発展し、年間約二千万ルーブル（邦貨換算八十億円）の利益をあげ、消費者への水産物の供給は一日百万ルーブル（邦貨換算四億円）以上になっている。また、生産計画量は、極東全体の約三分の一で昭和四十四年は五〇万トン、四十五年は六〇万トンである。四十四年については、西カムチャツカ海域のスケトウダラが主体をしめ、次いでニシンが多く、その他は、ホッケ・サバ・オヒョウ・カレイ・サンマ・メヌケ・ヘイクなどである。四十五年の内訳は、スケトウダラが約二〇万トン・ニシン約五万トン・ヘイク・サンマがそれぞれ五千・二千トン・その他となっている。この漁業局に付属するネベリスクトロール船団局、ホルムスクまき網海獣捕獲船団局のいずれも、大型母船の増強が計画されており、漁船は三〇〇馬力型より八〇〇馬力型が七〇〜一〇〇隻近く有し、スケトウダラ・ニシンを中心にサバ・サンマをトロール船団局では、この他に、カレイ・ホッケ・マダラを主たる対象としている。スケトウダラは主にミールの原料、ニシンはポーチカ漬けと缶詰、サバ・サンマは缶詰となっている。

スルメイカについては、まだ本格的な操業に

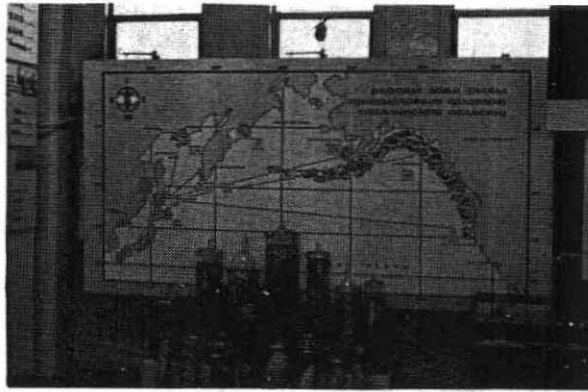
入っていないということ、現在は、南千島で試験操作を行なっている。しかし、食事の時にスルメイカの缶詰が出ましたが、水煮できれいに皮がむかれ、味の素・正油でおいしく食べられた。

このように漁獲対象魚が遠洋海域に伸び、利用資源の調査研究体制も同時に、それに対応して組織化されている。太平洋海洋漁業海洋学研究所・サハリン支所でもサブ資源調査のうち、東北・北海道及び南千島の太平洋側の海域を分担しており、また調査研究の歴史も浅く本年で三年目で、日本より種々教えられることが多いということである。また西カムチャッカのスケトウダラもおこなっておりこれについては、調査結果から、一操業当りの漁獲量の変動からみて、資源状態は比較的安定していると考えられている。

加工コンビナートで特に目についたのは、ホルムスクにある工場では、日本製・ドイツ製のスリ身用機械を設置して、冷凍スリ身の実験試作中であるとのこと、実際にか動している状態は、みる事が出来なかつた。

しかし、魚の高度利用ということで、鮮魚、または冷凍、缶詰などよりさらに新製品の開発に努力が払われている。只これらの原料をもとに、一般消費者の嗜好に合うようにする

ために種々工夫されていたが、なかなかむずかしいことが言われている。その他、ホルムスクにしても、ユージノサハリンスクにある加工コンビナートでは、都市消費者に対する即副食となるキュウリ魚・カレイなどの油揚げしたものなどの製品の生産多い。またサケのポーチカ漬は、薄く、小さく切り身にして、ポリ袋に入れ買い易く、しかも衛生的であった。このように消費者のために、いろいろ考えられた製品が出来ている。



サハリン州漁業局の操業海区
(ユージノサハリンスク博物館にて)

視察したサハリンの各都市をみると、その発展は目ざましく、躍動している感じがします。日本時代の建物などは、全く姿を消して新しい大きな建物、特に高層アパートが立ち並んでおり、また、町行く人々も、さっぱりしており、なかでも子供・女性がきれいに着飾って、ミニスカートが大流行していました。商品値段は、九年前より安くなっているが、衣類・装飾品などは、食料品などにくらべやはり高いようです。

九月二十四日午後、ユージノサハリンスクを出発、ネベリスクに着きトロール船団局長はじめ関係者の方々により西カムチャッカ・サハリンの視察旅行の無事終了と、日ソ両国の漁業の発展・再会を祈念して盛大な送別会が開かれ、ソ連関係者の厚情に感謝し、別れを惜しみながら二十一時、アカデミックベル号に乗船、ナホトカに向いました。

ナホトカに着く途中において、一行の希望と船長の計らいで、一夜、手釣りによるイカ釣り大会と刺身の会を催したことは非常に楽しく、また良き記念となりました。

視察には往復ともナホトカを経由し、同地において、ソ連極東漁業の総括をしている漁業総局の幹部、ウラジオの研究所の幹部の方々と意見を交換したなかで、資源を合理的に

調節しつつ利用するのが基本的な問題である。特に、現在、日ソ双方が利用する漁場は、ほぼ同じであり海洋資源の共同利用が望まれる。またサケ・マス・ニシン・カニなどが日ソ間で条約が結ばれているが、北太平洋全域の資源の合理的利用のため、日ソが先頭に立って、資源管理のため積極的に取り組む時が来ていることが強調されていました。

以上のように西カムチャッカ・サハリンの漁業事情の概要をのべましたが、ソ連が極東を基地とする北太平洋及び日本周辺の海域での漁業に対しては、積極的に拡大と充実の推進を計っており、それが国家機構という強力な背景のもとで、急速に発展し、これに漁撈の技術・加工技術の水準が高まってくると、現在、各海域で競合している日本の漁業も安閑としてはいられなくなるのであろうことが身にしみて感じられました。

終りに、極東漁業の漁場及び対象魚の概要をお知らせします。

極東全体の漁獲量は、全ソ連邦の約三分の一で、二二〇万トン以上であり、操業海域は、ベーリング・オホーツク海を含む北太平洋海域、日本近海・オーストラリア西部及びアラビア海などです。魚種別については次の表の通りです。

魚 種	海 域	漁 法
1) サケ・マス	カムチャッカ・サハリン・オホーツク・アムール	建網・曳網
2) ニシン	オホーツク海 (マガダン地方) 千島列島……………現在少ない オリュートル……………禁止されている ブリピロフ諸島付近 ……冬期操業	建網・まき網 " " トロール
3) カレイ類	ブリistol湾 カムチャッカ……………少なくなっている	トロール "
4) スケトウダラ	オホーツク海 ベーリング海……………量的に多くない	トロール "
5) ヘイク	北太平洋・アメリカ西部沿岸	
6) メヌケ類	アリューシャン列島・アラスカ湾	トロール
7) ギンダラオビョウ	ベーリング海・アリューシャン列島	
8) マダラ	ベーリング海 その他の海域は混獲程度である	トロール
9) ヒメダイ	ハワイ諸島	トロール
10) アカマンボ ギンメダイ }	南ハワイ・アラビア海・オーストラリア	トロール
11) サンマ	南千島及び日本太平洋側海域	棒受網
12) タラバガニ ズワイ アブラガニ	……オホーツク海……………限界に達している ……" ……オリュートル……………少ない	刺網 カゴ
13) サバ	千島沖合及び日本太平洋側海域	まき網
14) スルメイカ	南千島	釣
15) コマイ	カムチャッカ・サハリン 内水面……………少ない	トロール 水下網

このうち、オーストラリア・アラビア海の調査は、4～5年前よりおこなっているが、企業化はしていない。

ソ連邦の漁業基地 ナホトカ市を訪ねて

漁業資源部 内藤政治

今年の日ソサンマ協同研究会議は、九月十四日から十日間ナホトカ市で開催されましたが、幸いにも、水産庁漁業調整課山内課長補佐を団長とする一行六名の代表団に加えられ、本紙で紹介した第一回目のソ連工船上の会議とは別の角度から、再びソ連漁業の一面に触れる機会を得ましたので、今回は、見聞した漁業基地ナホトカの姿を中心に紹介いたします。

発展を続けるナホトカ市

ナホトカ湾は実に宏大で、風光明媚である。商港、漁港はこの奥の入江にあるが、その広さは鉦路港を上廻る天然の良港である。

ナホトカは、市制二十周年を迎えた新興都市で、当時の記念碑には、網をひく漁民の像がくっきりと刻まれていたが、人口十万二千のうち七十％が漁業関係従事者だとのこと



ナホトカ漁港

あるから、文字通りの水産都市と云えよう。ソ連の報告によると、極東水域における漁獲量は急速に増大して、一九六三年には総漁獲量の $\frac{1}{3}$ を占めるに至ったと云われる。なかでもナホトカとウラジオストクを基地とする沿海州が目ざましく、一九五六年から六三年の八年間に六倍も増加して、極東漁獲量の半分を占めるようになったが、それは両港に工船や漁船が多数増強されたためだと報じられている。極東漁獲総局、極東漁業海洋学研究所の所在するウラジオストクとどのような関係にあるのか判らないが、一万トン級の母船が七隻位は横付けできそうな岸壁には、大型グレンが林立して壮观であるし、冷蔵庫、ドック、製缶工場など関連施設も充実している、遠洋漁業の基地として、その発展を約束する陳容を確かに備えている。

また、漁民の教育にも力が注がれ、一九六四年現在、極東の漁業関係者の中には、高等教育、中等教育を受けた専門家が一人人以上いると報ぜられているが、ここにもそれに相当すると思われる各級の海員学校（水産教科を含む）があつて、巾広く基盤作りがおこなわれているという感をうける。また、大講堂、劇場、図書室などを備えた船員文化官殿や漁民官殿に案内されたが、室内外の装飾はそ

漁民文化宮殿



建設進む漁民住宅



の名に心わしい豪華なものであった。目下、盛んに住宅建設が進められていて、ナホトカはこれからの街だと説明されていたが、雄大なナホトカ湾を望む地勢には、それを保障するに充分な条件が備わっている。

店頭みる多彩な水産食品

ソ連は、国民の栄養蛋白質を生産費の安い水産資源に求めて、その増産を計っていると伝えられているが、店頭でも畜産食品に劣らぬスペースがさがされていて、種類も表のようにまことに多彩である。この国でも、イクラやカニ缶は高嶺の花らしく店頭には見受けられなかったが、総じて冷凍品が意外に多いし、また食べないと云われていたスルメイ

カやコンブ製品も揃えて、品種が日本とほとんど変わらない。このことは、水産物が計画どおり国民の食生活に相当浸透してきていることを物語るものであろうし、それは同時に、これらの資源をめぐる日ソの競争が、今後ますます激しくなるであろうことを示唆しているようでもある。

接近したサンマ資源論

最初は、系統や年令などの見解がまったく

魚種名	価格(円)	魚種名	価格(円)
(冷凍品1キロ当り)		(缶詰1半ポンド缶)	
北洋赤魚	二〇〇	コンブサラダ	一二八
ギンダラ	二六〇	イワシ	四八四
オヒョウ	四四〇	(油漬)	
スルメイカ	五二〇	サンマ	二四八
マダラ	二六〇	イカ(脱皮)	二八〇
ホッケ	二四五	チカ	三七二
コマイ	二七二	コマイ	二五二
カレイ	一六〇	ニシン	三二二
以上いずれもドレス		(油漬)	
(その他1キロ当り)		マグロ	三二〇
ニシン	四四〇	ニシン	二七二〇
ポーチカ		ポーチカ	
ニシン油漬	五〇〇	(五キロ詰)	
ステウイクラ	四八〇		
ニシン燻製	五七二		

異っていたので、近年の来遊資源の減少原因についても、極端な表現をすれば、日本側の環境要因説に対してソ連側は乱獲説といった意見の対立があった。しかし、同じメンバーで三回も会を重ねると、あらゆる点で意見が非常に接近し、今回の会議では、ソ連側も年の減少の主因は再生産条件の悪化によるものであると指摘して、大規模な調査結果からそれを実証的に説明していたのが注目された。つまり、黒潮の蛇行とサンマの再生産には密接な関連がみられるが、昭和三十五年頃からはその変動期で、遠州灘沖で大きく蛇行迂回する年が多くなった。このような年には内側に反時計廻りの環流(紀州、遠州灘沖水塊を指す)が生じ、湧昇流によって底層から栄養塩が運ばれプランクトンが大量に発生するが、水温が適温を下廻るために、それが悪条件となって産卵場は沖合に移らざるを得なくなる。

しかし、同じ水域で発生するサバは、適温が低いために、それが好条件となって再生産量が増大した。もともと同じ体長でもサバの方が口が大きくて捕食能力が優れているが、体長十糧位のサバの胃袋をみると、十尾に一尾り割合捕食でサンマの稚魚を食べていて、喰う喰われるの直接的な力関係でもサバの方が強

北辰丸の

火災について

い。従ってサバの資源が増大すれば、その圧力は甚大なものとなって、生存競争におけるサンマの敗北は歴然としてくる。つまり海洋変動をきっかけとして、サンマの再生産条件は雪だるま式に悪化し、極端に減少してきたという説明である。日本にも同じような説はあるが、これほど具体的な指摘はないし、研究面でも着実に発展している印象を受けた。

ただ、前回の会議で、両国が一致して「最近では再生産条件が好転しつつあるので、資源は徐々に回復に向うであろう」と予測したが、事実その通りに推移して、四十五年度の漁獲量が前年を上廻ったことは幸いであった。

以上で報告を終わりますが、ナホトカは札幌との交換で初めて領事館ができたところで、湾内には木材積取りの日本船が舳舳相和していたし、将来は技術提携による開発基地も建設されるとか大変友好ムードに溢れていて、われわれも暖かい観迎を受けた。

会議では、サバ資源も討議の対象に加えるよう強い要請があったが、ソ連漁業の着実な発展をまのあたりにみて、北方資源をめぐる競争がますます激しくなるであろうことを強く感じ、同時に適切な資源管理を計るための調査研究の重要性が一段と高まってきたことを、改めて痛感しました。

去年二十二日、当場所属試験調査船北辰丸の火災事故に際しまして、早速お見舞を賜わり衷心より厚くお礼申し上げます。

お蔭様で関係機関並びに関係各位のご尽力ご支援を得まして、復旧予算についても早速措置され、去る九日室蘭市檜崎造船所に回航上架し、二月未成予定で復旧工事を鋭意進めている現況でございます。このため、三月におけるサケ、マス漁場調査を始めとして、調査研究の推進に支障をきたさぬ目安もたち関係業界のご期待に添うことの出来得ますことは、一重に各位のご協力ご援助のたまものと深く感謝申し上げます。

今後はかかる事故を絶対に起さぬよう職員一同充分留意し、その完璧を期している次第でございます。

ここに、近況ご報告かたがた厚くお礼を申しあげます。



◇ 新年お目出度うございます。今年、第三期北海道総合開発計画実施の初年度に当ります。目的とする「生産と生活が調和する豊かな地域社会の建設」に向って、表紙写真のサケ（アラスカ）のように、邁進したいと思えます。

◇ 本号では、当水試職員の海外視察記を特集しました。北方漁業資源をめぐる国際競争がますます激しくなってきた現在の現在、相手の漁業動向には深い関心をもたれていることと思えます。参考になれば幸いです。

◇ 発刊のおくれましたことをお詫びいたします。生産と調査研究を結ぶ広場として、本誌の充実を計っていきたいと思えます。ご意見、ご希望をお待ちします。

釧路水試だより 第23号

発行月日 昭和46年1月20日

編集発行人 福原 暁

発行所 釧路市浜町16

北海道立釧路水産試験場

印刷所 釧路総合印刷株式会社